

都道府県別賞一等

命の恩人

秋田県 秋田大学教育文化学部附属中学校 一学年

高橋 蘭

母はわたしを「命の恩人」と言う。なぜなら母はわたしを妊娠したことがきっかけで受けた妊婦健診で子宮にガンがあることが分かったからだ。妊娠を継続するために、母子の命を守るために、たくさんの医師や看護師さんにお世話になったと家族に聞いている。もちろんわたしにはその時の記憶はないが、わたしを産んでからも母乳や体調面から投薬ができなかったり、すぐに手術ができなかったり、とても大変だったそうだ。その話の最後に母は必ずこう言うのだ。

「産まれてきてくれてありがとう。ガンに気づかせてくれてありがとう。蘭がいなければママはもっと悪化して、命を落としていたかもしれないね。」

わたしはそう言われる度に、何もしていかないのに……と言葉には表せない漠然とした複雑な気持ちと感情を抱いてしまう。

そこで当時母を支えていた存在とは、どんなものなのかという疑問を持った。もちろん父と姉だろう。そして産まれたばかりのわたしだろう。しかし家族の存在だけだろうか。それだけではないはずだと考えていくうちに生命保険が家族や家計の一助になったのではないかと思いついた。

生命保険。一日一度はテレビCMなどで耳にするが、調べていくうちに生命保険の仕組みと意味、そして必要性を初めて知った。

それは、病気や手術などの大きなリスクは予告もなく不意に、突然起こるものだからだ。しかも重大であるほど治療には多額のお金が必要になる。しかし働くことが難しく治療費を工面できない場合は満足な医療を受けることを諦めなければいけないかもしれない。そのリスクのループに備えるために前もって加入しておくのが生命保険だったのだ。そして、生命保険会社は契約者の保険料を資産運用して増やし、それらを個々の契約に則って契約者や受取人に保険金・給付金として支払うという仕組みだ。ここから二つのことが分かった。一つ目は、安心感。ひとりが支払う保険料が少額でも、まとめて運用してくれることで大きな保障につながるという安心感。二つ目は、相互扶助。「自分だけの保険」ではなく、誰かの未来や家族の幸せを守る手助けが同時にできるという思いやりの精神だ。

ここで、わたしは少し怖くなった。決して裕福ではないわが家がもし保険に入っていないかったら、今とは違う生活になっていたかもしれない。母はその後手術を受けて無事にガンを摘出し、受け取った給付金で現在も通院することが

第63回中学生作文コンクール

できている。当時、母の付き添いで仕事や学校を休むことが多かった父と姉も以前と変わらず日常を送ることができている。

生命保険はケガや病気をした時に家族のように肩を抱いてくれたり、毎日声をかけたりはしない。しかしそれは目に見えなくても、わたしたちの人生を支え、そっと寄り添ってくれているもの、豊かに明るく暮らしつづける明日への欠かせないもの、助け合いで成り立っている優しさなのだと感じる。

わたしはすでに○歳からガン保険に加入している。この作文を書くにあたり母から聞いて初めて知った。きっと母は、自分が大変な思いをした経験から産まれてくるわたしに何があっても良いように生命保険の加入を決めたのだろう。母がわたしを思いながら保険会社や種類を悩み決めたのだと想像すると今も温かい気持ちが入み上げてくる。

「命の恩人」

わたしはまだ母に感謝されることは何もできていない。しかしこれから無事に産んでくれたことに感謝しながら、たくさん母の助けになろうと決めた。助けたり助け合ったりしながら、自分の人生を考え、同じように周囲の人の人生を大切にして生きていきたいと思う。時には命の恩人になったり、なってもらったりを繰り返して、優しさのループが広がればどんなに良いだろうか。わたしにとって生命保険とは、まさに命の恩人なのだ。